

本発表では、自殺の道徳性や当人にとっての悪さ（あるいは善さ）とは区別されるところの、自殺の合理性について、既存の議論のあり方を批判し、別の枠組の下でそれを検討する。自殺の合理性については、人格ないし自律的存在を消滅させてしまうことがそれ自体として不合理であるという議論もあるものの、主流な議論の仕方は、自殺して短くなった生と自殺せずにより長く生きられた生を比較して、前者の方が後者より当人にとってのネット善——当人にとっての善から悪を差し引いたもの——をより多く含む（と期待される）のであれば自殺は合理的であり、より少なく含む（と期待される）のであれば自殺は不合理である、とするものである。だがこの議論の仕方は、死の当人にとっての悪さ・善さについての有力な理論——剥奪説——を自殺の合理性の理論と混同しているのでなければ、合理性についての特定の理論——自分の生が可能な限りうまくいくことだけを目指して行為するのが合理的だという自己利益説 self-interest theory——を前提しているようにみえる。自己利益説について、当人（のみ）の（遠い未来を含む）各時点の利益を偏りなく算入することや、当人がもちうる自分にとっての善・悪以外のものへの関心を勘定に入れないことを求める点で、異論の余地があることは、既に Parfit が 1980 年代に指摘していた。本発表は、こうした前提を除いた場合に、自殺の合理性について如何なる結論が導かれるのかを追究し、当人の合理的自己決定を支援するとしたらとるべき対応を巡る含意を考察する。